

翼の王国

今月の旅先
イギリス／沖縄

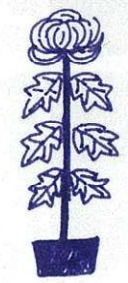
2

ご自由にお持ち帰り
ください



宿と一日

文 絵 山下アキ
text & illustrations : Aki Yamashita



日常に溶け込む宿

「篠山城下町ホテル

NIPPONIA」

(兵庫県丹波篠山市)

快晴の11月初頭、澄み切った青空と少し冷たく甘い風の匂いが季節を感じさせる。目指すは兵庫県中東部に位置する丹波篠山市。丹波と聞いて最初に思い浮かべたのは「黒豆」だったが(お正月のおせち料理まで

連想してしまう私)、いえいえ、それだけではありません。400年以上の歴史を持ち国の史跡に指定されている、かの徳川家康が築いたことで知られる篠山城が有名だ。今はお城自体はないが、忠実に再建された

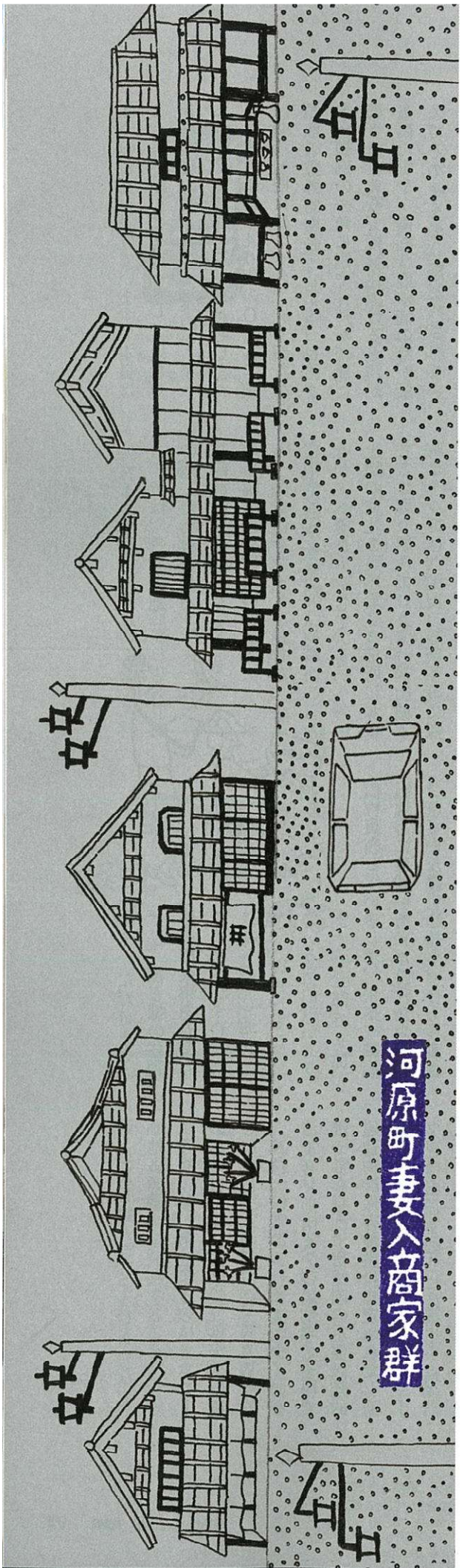
大書院や当時のままの天守台が残り、城の跡地としての情緒を持つ。今回はその篠山城下町全体を宿として過ごせるという『篠山城下町ホテル NIPPONIA』で1泊2日の旅をする。

伊丹空港から車を走らせること約1時間、立派なお濠と石垣が姿を現した。早々に篠山城を観光することにした。天守台からは「丹波富士」などの山々に囲まれた丹波篠山市内を見下ろすことができる。お城のスケッチをしている地元の方々がい、なんだかほのぼのとした気分になる。城跡をぐるりと囲んだ風情漂う町並みを通り、フロントのある棟に向かった。白い暖簾をくぐり、往時のままの低い玄関口をすこし屈んで一歩中に入ると、昔の姿を残しつつも、清潔感のある洗練された佇まいに驚いた。

チーフの沖田美咲さんにご挨拶をして、宿についてお話を伺った。「こちらの棟は『ONAE』棟と申します。フロント、レストラン、そして

ずらりと並ぶ商家は、狭い間口からは想像できない奥行きを持つ。格子模様の暖簾がかかるのが「KAWARANO」棟。見過ごしてしまうほど通りに溶け込んでいた。

河原町妻入商家群



5つの客室を設けています。本日はこちらでチェックインしていただき、離れのお部屋にご案内をしてお食事の際はこちらにお越しいただきます。築約140年のONAE棟は明治初期に建てられ、元々銀行の頭取の方のお屋敷でした。見渡すと、棟内の一角に竈や井戸が綺麗に残されており、壁を見上げると竈から出た煤や、雨漏りの水滴の跡が散らばっている状態が残されています。当時の姿を残しつつ、新しく生まれ変わる、その加減が絶妙である。

「NIPPONIA」では、日本各地に残したい景観のある町の古民家を、その土地の人の思いを汲み、歴史性を尊重しながら、宿泊施設や飲食店、店舗へとリノベーションして、その土地の文化を実感できる場所にするに取り組んでいます。篠山城下町ホテルでは、歴史ある城下町に点在した客室に暮らすように泊まることで、丹波篠山の文化や歴史を体感



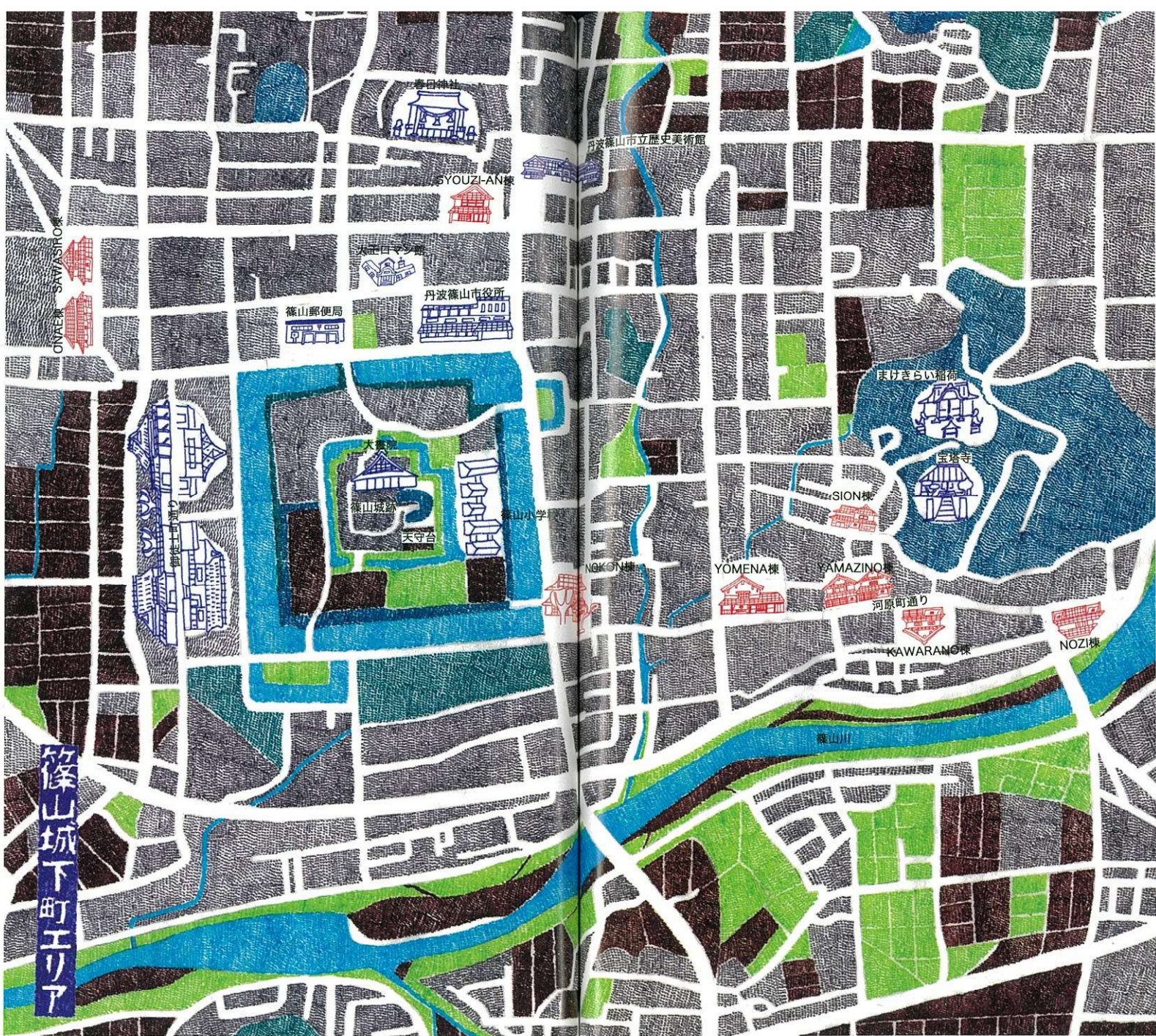
篠山城で絵を描くご婦人や殿方。

していただけです。ぜひ、棟と棟の移動中の出来事をお楽しみください。ONAE棟と同じ通りに「SAWASIRO」という宿泊棟があります。全部で9棟、街に点在しています。すべてに篠山地方にお城があった時代から奉納されていた歴史を持ち、今も愛育されている菊の名前がついています。菊の名前とは素敵！「NOZI」

「YOMENA」「SION」など、心地よい響きだ。今回、私が宿泊するのはフロントのあるONAE棟から徒歩30分ほどに位置する河原町の「KAWARANO」棟である。チェックインを済ませ、沖田さんに客室まで車で送ってもらおう。宿は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された「河原町妻入商家群」にあり、600メートルほど続く通りには格子、袖壁、税など往時を感じさせる商家が軒を連ねている。KAWARANO棟も元々商家だったそう。扉を開けると広い土間がそこんとあり、奥行きのある造りになっていた。何も置いていない土間はほっとひと息つかせ、奥の客室へと誘う前室のようである。通されたのは902号室。外観に比べ、かなりモダンな雰囲気だ。家具も柔らかな色合いで家のように落ち着く空間。入り口の土間に始まり、室内で



街のいたる所に当時のままの格子が残る。一つひとつ表情が異なり、どれも趣がある。「NIPPONIA」のモチーフでもある。

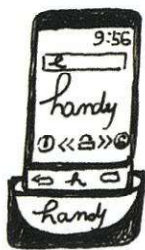


篠山城下町に点在する宿。宿とフロントを往復するたびに新たな発見があった。



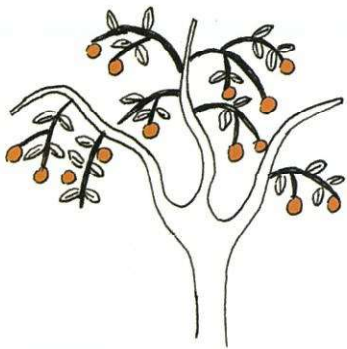
幻想的な朝霧。水鳥の通り道がきれいに残る水辺も印象的。

は床の段差や柱、箱庭の眺めなどには古民家らしさが色濃く残っているのに、水回りなどは快適に過ごせる空間に新しく生まれ変わっていてとても気持ちがいい。新鮮だったのは、客室専用のスマートフォンがフロントとの連絡ツールとして置いてある



部屋に置かれたスマートフォン。ちょうどよい頃合いにスタッフの方が連絡をくださる。

ことだった。夕食の時間まで、少し街を歩いてみることにした。古い商家が軒を並べているが、そこに人が住んでいる気配や息づかいが感じられる。昔ながらの本屋さんがあったり、下校中の中学生とすれ違ったり、街の日常がそこにあることを実感する。徐々に日が暮れ始め、お腹も空いてきた。部屋に戻ると、ちょうどスマートフォンに夕食の知らせが入った。スタッフの方の送迎でONAE棟のレストランへ。夕食はフランス料



柿の木があるお宅がたくさんあった。11月はちょうど旬で、きれいに色づいていた。

理のコースで、すべて丹波篠山の食材を使っている。前菜からデザートに至るまで素材の味を感じられる料理たち。私が一番好きだったのは季節野菜のポタージュで、野菜が凝縮

され、甘くてとても美味しい。コースを食べ終える頃、沖田さんの言葉を思い出していた。「当ホテルではテロワール・エ・ナチュールをテーマにフレンチを提供しています。土地が持つ魅力を自然そのままに活かして、素材そのものの美味しさを引き出したお料理で、丹波篠山の土地の豊かさに気づいていただきたい」。たしかに、食材は空気、水、土からできている。地元のを食すことで、丹波篠山を体感することができたような気がした。